

報告番号 甲 乙 第 号

須山智裕君 博士学位請求論文審査報告

論文題目： 戦中との連続性における中間小説・風俗小説の再検討
——南方徴用作家、林房雄・石坂洋次郎・丹羽文雄を中心に

論文審査担当者

主査 慶應義塾大学文学部教授
同大学院文学研究科委員

小平 麻衣子

副査 慶應義塾大学名誉教授

松村 友視

副査 立教大学文学部教授

石川 巧

論文の概要

本論文は、林房雄、石坂洋次郎、丹羽文雄を中心に、アジア・太平洋戦争期の南方徴用体験を持つ作家について、戦後中間小説における活躍や高評価にいたる理論・実作の諸相を、軍が発行していた雑誌の大衆小説なども参照・比較しながら論じるものである。

本論文の構成は、以下の通りである。

はじめに

第一部 陸軍報道班員の従軍体験

第一章 林房雄の南方体験と「失はれた都」——大東亜の「夢」を葬るまで

はじめに

一、"陸軍報道班員、林房雄

二、「剣と詩」の頓挫から大衆雑誌での再出発へ

三、共鳴する日比のナショナリズム

四、大東亜の「夢」の行方

おわりに

第二章 石坂洋次郎の「人間的接触」という説得法——フィリピン従軍から『青い山脈』へ

はじめに

一、フィリピンで学んだ宣撫の技術

二、フィリピンから持ち帰った「作家的嗜欲」

- 三、民主主義はダンスから
- 四、「ザックバラン」に話し合う
- おわりに

第二部 くろがね会と海軍報道班員

第三章 海軍報道班文学挺身隊と国民大衆雑誌『海軍報道』

- 一、海軍報道班員の先鋭化
- 二、『海軍報道』の概要
- 三、『海軍報道』の誌面構成
- 四、海軍宣伝の物語化

第四章 前線慰問雑誌『くろがね叢書』の探偵小説／歴史・時代小説

- 一、『くろがね叢書』の概要
- 二、探偵小説の制約の緩和
- 三、戦争小説、歴史・時代小説と兵隊

第五章 丹羽文雄における「デフォルマシオン」——私小説「海戦」から風俗小説への転回 はじめに

- 一、海戦の主観的な領略
- 二、「海軍暴露物」は「現実そのまま」
- 三、「デフォルマシオン」をどう訳すか
- 四、「理想の良人」のなかの人間

おわりに

第三部 風俗小説の興隆前後

第六章 林房雄の戯作者としてのカムバック——中間小説概念の黎明に触れて

はじめに

- 一、「新戯作派」への追随
- 二、「新戯作派」との差別化
- 三、大衆文学界における覇権
- 四、『文学界』の中間小説運動
- 五、文壇への異色のカムバック

おわりに

第七章 〈アルチザン〉の批評精神——『風俗小説論』を脱却するために

はじめに

- 一、〈丹羽文雄は芸術家ではない〉——アルチスト・アルチザン論争
- 二、『風俗小説論』第四章の奇妙な覇権
- 三、風俗小説とマルクス主義
- 四、人間理解の実践報告——「鬼子母神界限」

おわりに

第八章 石坂洋次郎「石中先生行状記 根ツ子町の巻」論——時代の「伝説」化を衝く風俗小説

はじめに

一、「好色文学」か「芸術作品」か

二、根ツ子町の名コンビ

三、「フィクション」と「デフォルマシオン」

四、「伝説時代」という批評

おわりに

論文の要旨

第一部は、陸軍報道班員が戦中に何を、それをどのように転化して戦後の復活に至るかを明らかにする論文群である。第一章では、プロレタリア小説から民族主義へ極端な転向を遂げた林房雄を取り上げる。これまで知られていなかった林の南方視察の経緯や旅程を調査したうえで、敗戦後、林が戦争協力者として窮地に立たされながら作家として活躍できた一因として、彼が戦中の体験を、わずかな書き換えで価値観の異なる戦後に合致させていく方法を分析・提示する。例として戦中の「剣と詩」(1944年)と占領期の代表作「失はれた都」(1947年)に共通して描かれるフィリピン独立運動の闘士と日本人の交流が、敗戦による日本国家の位置づけの変化に応じて書きかえられた様を挙げている。

第二章では、戦後の「民主主義の教科書」として名高い石坂洋次郎の「青い山脈」(1947年)に、戦中のフィリピンにおける宣撫活動の経験が影を落していることを明らかにする。石坂が宣撫活動によって他者としての民衆を体験したことから、「青い山脈」が観念的な民主主義を教化するにとどまらず、民衆による民主主義の形成過程を描いたとして、作中の話し合いの場面を具体的に取り上げて分析している。

第二部は、海軍省外郭団体・くろがね会が発行していた二つの雑誌の分析と、海軍報道班員・丹羽文雄の従軍体験と戦後の復活までを辿る論文で成り立っている。第三章で取りあげる『海軍報道』(1944年5月～1945年3月)は、海軍の募兵を目的とし、20万部発行された号もある国民大衆雑誌である。この雑誌の概要や誌面構成、同誌と深く関わる海軍報道班文学挺身隊の結成の経緯や活動をおさえ、そのうえで、掲載小説が、海軍の宣伝内容をいかに実現しているかの具体相を確認し、アジア太平洋戦争末期における南方徴用作家の終局的な挺身のありさまを明らかにした。

第四章で扱うのは前線慰問雑誌である『くろがね叢書』(1942年12月～1945年2月(推定))である。これは、『海軍報道』とは異なり、娯楽性を目的に、既発表の読物を集めたアンソロジーである。それぞれの作品の初出を膨大な時間をかけて調査し、さらに占領期の単行本に再録されるまでを追ひ、時局を反映した改稿の様相、また改稿は微細であるにもかかわらず、社会通念が変化する長期間にわたって流通していく機構を分析した。思想統制の様態を具体的に示している。

また第五章では、丹羽文雄について、海軍報道班員として記録する役目を期待通りに果たした「海戦」(1942年)という作品から、戦後に「デッサン」に基づく「主観的歪曲＝デフォルマシオン」を主張する文学論への変遷を、同時代の大量の文学論と共に追っている。そして、戦後の価値観の逆転においていったんは評価を失った丹羽が、1947年前後の文壇を覆った「虚構派」と「真実派」の対立図式の中で有利な位置づけを獲得するにいたった戦略を明らかにした。

第三部は、中間小説・風俗小説の内実を文学史的な視座で捉えた上で、その再評価へと展開している。第六章では、林房雄が1947年に、小説は「いま・ここ」から離れる珍しい話という原型に立ち返るべきだと主張し、「妖魚」(1946年)が第一回大衆雑誌懇話会賞の首席を獲得するなど、大衆小説で覇権を握った経緯を周辺状況とともに明らかにした。また、太宰治や坂口安吾など文壇で評価される「新戯作派」に対し、自らの評論で戯作精神についての解釈を行うことで、彼らと同じグループであるかのような位置づけを獲得したと分析する。続けて、『文学界』の丹羽や舟橋聖一といった同人たちが、林とともに中間小説運動を推進したことが一因となって、当初は林の読物小説を代表とした中間小説という用語が、風俗小説を含むまでに拡散していった概念変容を明らかにしている。

第七章は、従来軽視されてきた1948年のアルチスト・アルチザン論争と周辺の言説を整理する。花田清輝から中村光夫まで、風俗小説家はアルチザンとされて評価が低い、対象となった作家たちはマルクス主義と距離を置く作家であり、その社会への批評が党派性によって認められなかった側面もあることを指摘した。本論は小説の批評性について、それとは別種の評価を試み、丹羽文雄の「鬼子母神界限」(1946年)を例に、人間をプロレタリアートやブルジョアに分ける観念的な行論は否定しながら、社会から排除され、リテラシーを持たない人間の問題を描くものとして読み解いている。そのような問題意識を含む作品を、低評価が付随する「風俗小説」とは区別する意味で「社会風俗小説」と呼ぶことを提唱する。

第八章では、「社会風俗小説」のさらなる実例として、石坂洋次郎の連作「石中先生行状記」のうちの「根ツ子町の巻」(1948年)を論じている。同作は、猥褻文書の頒布等を禁ずる刑法第一七五条を根拠とした摘発を受けたが、根拠とされた性的な話題には、第五章で検討した小説の描写法である「デフォルマシオン」が関わっている。戦中の帝国日本神話も、戦後の民主主義も、具現化されないまま言葉だけが氾濫・伝播するという意味で、一様に「伝説時代」であることを作中の吉田青年の発言などを通して看破し、そうした中での文学のありようを、滑稽に紛らしながら問うた作品であると位置づけている。

全体にわたり、中間小説・風俗小説の価値を問い直し、戦時期と戦後占領期の連関が軽視されてきた作家史・文学史の記述を問い直す必要を論じたものである。

審査の要旨

政治体制やイデオロギー、検閲の実際などについて、戦前／戦後を切断する捉え方に対しては、文学研究のみならず近接する諸分野において既に批判的な検討がなされているが、本

論はそれらをふまえ、対象期間を 1940 年代として設定し、敗戦を跨いだ言説空間の連続性を批判的に分析する。その際の指標として、通俗性ゆえに文学研究において論じられることの少なかった中間小説を中心として取り上げており、その点にまずもって本論文の大きな独自性がある。そもそも戦前から、純文学の内容が私小説に偏っていたことに対し、通俗小説の特色とされていたストーリー性を召喚して文学を刷新しようとする動きがあり、戦後の「中間小説」とは、その一つの表れとして、「中間」が標榜されたものである。だがその後数年のうちに、闇市や復員兵など戦後の世相を写して量産される「風俗小説」と同類視されるようになった。したがって、これらの概念の習合やそれぞれのジャンルやカテゴリーに分類される作家の傾向を検討することによって、極端に価値観の揺れる戦中から占領期にかけての文学理念のありかたや、具体的な権力関係、その中での個別の作家の戦略やパフォーマンスを同時に分析できる対象であるといえる。さらに分析にあたり、論者は膨大な資料を博搜し、かつ多くの先行研究に視野を及ぼしている。それに費やされた膨大な労力は他に抜きんでているといつてよい。

第一部第一章で論者は、林房雄が陸軍省の委嘱によって戦中に執筆していた「剣と詩」をめぐる南方体験が、未完に終わった同作を加工する形で占領期の代表作「失はれた都」に反映される様を作品に即して論じている。論者はそこに、アジア民族のナショナリズムを介した世界主義と大東亜共同宣言との共通性をとらえ、日本は敗れたがアジアの新興国独立の主導的役割を果たした、という同時代言説とのつながりを見出し、これを林の復活のひとつの要因としている。まず、林房雄が徴用作家のひとりであったことを実証的に裏付けることができた点は重要な成果である。また、本章は第六章と呼応する本論の導入であり、一人の作家を通して、戦前の南方体験、ナショナリズムの問題、大東亜戦争への認識、戦後の文壇における覇権争い、大衆文学や中間小説の捉え方など多岐にわたる問題を展開していく論者の方法を最も示した章である。

第二章では、石坂洋次郎の戦中の徴用における「宣撫」活動の体験が、戦後の沈滞期から脱するきっかけを作ったと指摘しており、独創性がある。具体的には、『青い山脈』の学校理事会の場面を取りあげ、石坂が、平易に伝えるという「宣撫」の技術を異なる思想内容に応用し、逆に「宣撫」では異物とされた民衆の多様な主体を展開させる様を見出している。論者はそこに、複数のイデオロギーの相対化によって受け手の主体性が重視され「相互性」が実質を伴うに至った戦後の姿をとらえ、占領体制と左翼思想双方による観念的な「民主主義」への批判を読み取っている。

第三章・第四章は、ともに海軍によって発行された雑誌を対象とする。第三章では、くろがね会から発行された大衆向けプロパガンダ雑誌『海軍報道』を取りあげている。軍の発行にかかる雑誌は、消耗性や敗戦後の廃棄によって通覧がきわめて困難なものがある。とりわけ『海軍報道』は、中国国家図書館・米国議会図書館などの海外機関を含む諸機関においてもそれぞれわずかししか保管されていない。論者は数年かけて、この調査・収集に努め、従来ほとんど注目されなかったこの雑誌における山岡荘八・海野十三ら多くの作家の文学活動

を詳細に検証するなど、貴重な成果をもたらしている。その上で論者は、これらの掲載作品は、海軍からの上意下達による不自由な立場で制作された文学の政治への従属の極地であり、文学者の主体的な挺身の意思は、海軍の宣伝内容に沿わせる形しか取りえなかったことを具体的に跡づけている。

同様に海軍内部での配布閲覧を目的にくろがね会から発行された前線慰問雑誌『くろがね叢書』を対象とする第四章では、探偵小説・歴史時代小説を中心とする既出読み物の再録アンソロジーとしての性格をふまえ、前線慰問の目的および言論統制下の時局を考慮した改稿過程を作品に即して検証している。特に価値を見出されてこなかった「再録」自体を方法論に結実させようとする点に工夫があり、娯楽と戦時イデオロギーを両立させる特色と、その戦中から戦後への一貫性が、通俗性という見かけによって見逃されてきたことを指摘するものとして説得力をもつ。

第五章では、丹羽文雄を対象に、『海軍報道』『くろがね叢書』掲載作品群との比較対照をふまえて、戦中から戦後にかけての文学観の推移とその戦略性を論じている。論者は戦中の報告小説「海戦」から戦後の「理想の良人」を取り上げ、風俗小説の確立に至る作中の「私」の後退を跡づけ、戦争責任が問われる時期の作家の主体の問題、また虚構性の導入による小説の刷新の様相をとらえている。「海戦」の「私」を、ツラギ海戦に参加した体験的実体と見るのではなく、テキストにおいて現場性を現出させる装置として捉え、戦後に丹羽が主張した「デフォルマシオン」論の原型を見いだしている。戦後の丹羽について、小説の流行的なテーマに注目してきた従来の研究に対し、テキストの語りや構造を分析し、さらに作家としてのポジションの確立に理論的な戦略もあったとの指摘は、多岐にわたる話題を組み合わせる工夫がなされている。

第六章は、戦後占領期における風俗小説の興隆前後の文学状況を論じる第三部の最初に位置する論だが、第一章と継続的な話題を持つ。林房雄の戦後の「ロマン」への志向を明らかにし、「妖魚」が大衆小説で覇権を握るに至る状況を明らかにする。その一方で、林は太宰治などの「新戯作派」とは必ずしも作風が近似していないにもかかわらず、自らの複数の評論において、当時の幅のある文学的概念を独自に整理し、時代の寵児である新戯作派に自らを組み入れるパフォーマンス的なふるまいを行ったことも見出している。メディア研究を取り入れつつ文学研究を展開させていく論者の方法の特色が顕著な章である。さらに、復刊された雑誌『文学界』に拠った丹羽や舟橋聖一らが中間小説運動を推進したことを発端に、「中間小説」という用語が、「風俗小説」と習合する概念変容を丁寧に明らかにしていることは、個別の作家の足跡を論じるだけでなく、文学史の問い直しという大きな目標を見据えたものだといえるだろう。

つづく第七章では、1950年代の風俗小説論争にみられるアルチスト／アルチザンの分節およびこれを受け継ぐ中村光夫と丹羽文雄の風俗小説論争をとりあげ、風俗小説について批評性を欠くアルチザンとし、近代文学の後退とみなす議論を論者は批判している。マルクス主義思想が優越的である時代における評価のバイアスを指摘し、丹羽の「鬼子母神界限」

(1946 年) を具体例として、マルクス主義的思想とのテーマの近接と表現法の違いを析出して別種の評価を試みている。「くらしが違う」という登場人物の平易な発言中にマルクス主義への近接を捉え、「簡単に名付けたり分類したりすることのできない批評」を風俗小説ならではの視点として見出す。「風俗小説」という語のネガティブなイメージから脱する意味で、今は忘却された当時の用語である「社会風俗小説」を検討し、その再利用を提起する点では、前章と同様、文学史の再考を目指している。

最終第八章では、その「社会風俗小説」の例として石坂洋次郎「石中先生行状記」の「根ッ子町の巻」が取り上げられる。「根ッ子町の巻」が掲載された雑誌が猥褻文書として摘発されたことをふまえ、論者はむしろそこに同時代の文学観に対するイロニーをとらえ、戦後日本という〈仮構〉を「伝説時代」として荒唐無稽のうちに表現している点に批評性を見いだしている。「伝説時代」とは、「具現化されないまま言葉だけが氾濫・伝播し、架空の〈戦後日本〉が仮構される時代」を含意するが、そこに託された批判は、戦中から占領期にわたる石坂のイデオロギー批判の継続性の中に位置づけられる。

最後に資料編については、先行研究における書誌情報の修正もなされ、有益である。特に『くろがね叢書』掲載小説の初出および再録のリスト」は本論にしか存在しない貴重な情報であり、研究の成果として正しく評価されてしかるべきである。

本論文は以上のように評価できるが、問題点がないわけではない。例えば、「はじめに」で、中野聡『東南アジア占領と日本人——帝国・日本の解体』（岩波書店、2012 年）が、日本占領下の東南アジアは、日本人が「被占領者としての「他者」」と向き合うことを通じ、「日本と日本人の戦後に開かれた「学びの場」」であった、と述べたことをふまえて自説を展開していくが、中野氏が傍点を付す「学びの場」とは、言うまでもなく生産的な意味合いでの「学び」ではなく、「日本帝国の虚妄」を思い知らなくてはならないという意味での自己否定的な「学び」である。戦前的な概念を検証しないままに戦後がはじまっていることを問題化してきた、メディア研究者、歴史研究者による成果は蓄積されている。本論文の立場も概ね明らかなが、論文全体を通して見たとき、戦中の作家の体験が戦後の中間小説の成功に連続するとの指摘が、「学び」をともしれば肯定的な評価としていると受け取られかねない個所もあり、自身の立場の精査と説明はさらに必要であろう。これは、一章ずつとしては各作家や作品について秀逸な分析がなされているものの、すべてを一貫する説明原理と関連させる記述が不十分であることによるものといえ、この点に関してはさらなる工夫が可能である。

また、戦後の個別短編の一部に基づいて議論を展開している点にも、今後のさらなる発展を期待したいところである。例えば林房雄は、戦前のプロレタリア作家としての活動から、検挙・転向を経てきており、戦後における『大東亜戦争肯定論』なども含め、戦前から戦後にかけての大きな変遷を視野に包括的・俯瞰的な視野から位置づける必要がある。石坂洋次郎についても同様に、「海を見に行く」に始まる戦前の「純文学」作品から戦中・戦後に及ぶ作家活動・言論活動を広範に視野に入れ、その大きな推移の中に事実を置き直すことが求

められるだろう。「中間小説」「風俗小説」を論ずる場合には、個別の作家だけでなく、戦後ジャーナリズムの急激な発展や受容者層の問題といった広範な事情を視野に入れることも必要とされる。

上記のような方法上の問題はなお残るとしても、戦中・戦後を分節し、中間小説・風俗小説を戦後の風俗や世相への単純な即応として低く評価する従来の視座に対し、1940年代論という枠組みの中に戦中体験とのかかわりを位置づけることでその真価を新たに見だし、作家史・文学史において戦時期と戦後占領期との連続性とそこに託された固有の批評性を問い直す必要性を提起する本論文の視点自体の有効性はゆらぐものではなく、ここに提起された問題意識の延長線上に新たな文学史観が構築される必要性和可能性は、きわめて大きいと考えられる。

以上の諸点から、審査委員一同は、本論文が博士（文学）の学位授与に十分にふさわしいものであると判断する。